

## 1. Men for Others

第28代イエズス会総長  
ベドロ・アルベ

本稿は、1973年7月31日、ロヨラの聖イグナチオの祝日に、スペインのバレンシアで開かれた、ヨーロッパ・イエズス会学校卒業生大会において、卒業生たちに向けて英語で語られた講演の邦訳である。この講演で初めて掲げられた“Men for Others”という標語が爾後イエズス会教育のモットーとなったことに留意したい。尚、本訳文は、イエズス会教育推進委員会編集『イエズス会教育基本文献集』（2001年5月24日発行）所収のイシドロ・リバス、李聖一、両イエズス会員による邦訳に当テキスト編集方針に則って手を入れたものである。

### 正義のための再教育

近年、正義のための教育がカトリック教会では主要な関心事のひとつとなってきました。なぜでしょうか。それは、正義の推進や抑圧された人々の解放に関わることが、キリストから教会に委ねられた使命の不可欠の要素であると新たに認識するようになったからです。この認識に促されて、カトリック教会は、カトリック信者のみならずすべての人を教育しようと、いやむしろ再教育しようと、多大な努力を払っています。そうすることによって、私たちみな個人としても社会としても、福音の精神を活かし、キリストの姿をこの世に表すことができるようになるのです。

### MEN FOR OTHERS

今日、私たちの教育の第一は、「他者のための人間 (men for others)」を育成することではなればなりません。すなわち、自分自身のためではなく、神のため、全世界のために命を与えたキリストのために生きる人間、最も小さな人々のための愛を含まないような神の愛など考えられない人間、人間のための正義とつながらないような神の愛などは茶番だと強く感じる人間です。

### では何をしなければならないか

このような教育は、世界のいたるところで流布している教育の潮流とまったく逆行しています。私たちイエズス会員は、教育使徒職に常に一生懸命に取り組んできました。今もそうです。では、何をしなければならないのでしょうか。潮流に流されていいのでしょうか、あるいは逆行すべきでしょうか。イエズス会学校の卒業生を前にして、イエズス会の総長として、私はこ

れが最もふさわしいテーマだと考えています。

まず最初に突然ですが、次の質問から始めたいと思います。「私たちイエズス会員は正義のための教育をしたでしょうか。」

私も、そして、多分あなた方の先生の多くが、率直に「いいえ、私たちは、そのように教育してこなかった」と答えると思います。もし、今日の教会が示している深い意味での“正義”とか“正義のための教育”といった要求の実現を考えるのでしたら、私たちは、確かに、正義のための教育をする態度をとってはいませんでした。あなた方もこの自己再評価には同感だと思います。また、あなた方も、正直に考えれば、今日の教会が要求している正義の理想をもって、不正に対して行動するのを目的とした訓練を受けたことはなかったように思うでしょう。

もし、過去にそのような教育を受けなかったとすれば、私たちは、卒業生とお互いに協力して、その欠陥を補う必要があると思います。イエズス会学校でなされる教育が、世界の正義の要求に応えられるように、皆でこれから努力することが、今一番必要とされているのです。

### 神の意思に従う

この問題は、確かに困難なものです。解決できない問題ではありません。過去の失敗や歴史的な制約に縛られることなく、私たちは目的を達することができるのです。それは、絶えず神の意思を求めることによって可能になるからです。これは、理性や知識の重要性を否定することにはなりません。

この神の意思に沿った決意を固める上で最も基本的な方法の一つとして、聖イグナチオの霊操があります。この霊操は、絶えず新しい心を私たちに保たせてくれ、常に新しい事態に適切に対処できるようにしてくれるのです。また、ある特定の国や社会・状況に限られずに、どんな時代・状況の下でも、神が私たちをどこへ導こうとされているかを知ることができ、その導きに応える、実現性のある普遍的な選択の道が、私たちの前に開かれます。終極的には、神が御自ら全ての源として、私たちに代って、私たちの道を見出してくださるのです。

神の意思以外の何ものにも惑わされないという、この“徹底した態度（不偏心）”こそ、イエズス会とそのメンバーに与えられた精神ですが、イエズス会とそのメンバーは、また広く、カトリック学校は、多種多様の可能性—時代の変遷によって必要とされる何事にも対処できる姿勢—を教育する立場に置かれていると思います。

### 変わろうとする心構え

過去において、確かにイエズス会の教育には限界がありました。それは、その時代の限界でもあり、人間の限界の結果でもありました。けれども、もし、学生たちに与えた教育が、社会からの新しい問題に対決していこうとする開かれた心を与え、また、自分が変わろうとする心を与えたとすれば、その教育は決して失敗ではなかったでしょう。その自分が変わろうとする心というのは、聖書の言葉で“回心”と言われていることです。学生たちが生きた神の声に耳を傾け、また、新しい光を求めて毎日福音書を読むように、私たちは育てたつもりです。また、

移り変わる時代の中で、教会と共に考え、内容は変わらなくとも永遠の真理と新しい特色を持った、その時代に必要なインスピレーションを見つけるように育てたつもりです。

もし学生たちがイエズス会学校からそれを得たとすれば、学生たちは一番必要なものを得たと言え、また、それは、将来に対して、大きな信頼と希望を与えてくれるのです。

## 第1部 正義とは

これから、ご一緒に、全人類の先生であるイエスに耳を傾けたいと思いますが、そうするにあたって、二つのことを考えてみたいと思います。

まず一つは、“正義とは何か”、言い換えれば、福音書と時のしるしに照らされて、今日にあてはまる正義の概念を深めたいと思うのです。もう一つ、“私たちはどのような人間を育てたいのか”、あるいは、“すでに育った私たちも、どのような人間に変わっていく必要があるのだろうか”ということについて、考えてみたいと思います。

言い換えれば、今日の教会あるいは世界には、どのような人間が必要とされ、求められているのか、ということについて考えてみたいと思います。

1971年のシノドス（世界司教会議）は、「世界における正義」という宣言を出しました。その初めに、次の言葉があります。「世界から一堂に会し、キリストを信じる全ての人々と善意の人々と一体となって、全てを新しく造り上げる聖霊に心を開き、私たちは、正義を世界に広めることが、神の人間に与えられた使命であることについて考察しました。時のしるしと歴史の流れの意味を慎重に見究め、全人類の救いである神の御計画に全面的に協力できるように、神のみことばに耳を傾けました。そうすることによって、今日の社会の大きな不正を感じることができました。人間の自由を束縛して、全人類の大部分の人々を、より人間らしい兄弟的な世界から束縛している権力、圧力、束縛をもたらす機構がある、ということが判りました。と同時に、世界の中から、新しい強い動きを感じました。多くの人々が新しい正義にあこがれ、そのために闘いつつあります。人々が団体をつくり、自由になって、自分の将来を他人に決められてただ従うということなく、新しい意識に燃えて、自らを解放し、自分で決めることができるようになりたいものです。これは、単に個人的なレベルで留まることなく、同様に、国家というレベルにおいても言えることで、国々が団結して、他国に服従することなく、国家の将来は、その国家で決めることができるようになりたいものです。」

### 教会の呼びかけ

ここで注意していただきたいのは、前述のような見解が、これまでの教会の伝統的な言葉の単なる繰り返しではない、ということです。そして、単に抽象的な正義を述べているのではなく、虐げられ苦しんでいる人々を効果的に救済するために、神の教会と全ての善良な市民がはっきりとした態度と行動を取るように、神が呼びかけておられるのだということを伝えているのです。

このような時のしるしの見方は、この1971年のシノドスに端を発したわけではありません。すでに、第二バチカン公会議で始まり、「ポプロールム・プログレッシオ」という回勅の中で正義の問題に適用されています。

その反応は広がってゆき、1968年にメデリンで開かれた中南米地域の司教会議で、次いで1969年にはカンバラでのアフリカ地域司教会議で、そして1970年のマニラにおけるアジア地域司教会議で、といったように次々に議題として取り上げられ、最後には、1971年にパウロ6世がこうした動きをまとめて、「オクトジェシマ・アドヴェニエンス」という回勅を通して、あの偉大な呼びかけをされたのです。

### 正義のための活動

シノドスの宣言は、このような流れを受けて、一歩押し進めたものです。例えば、次のようにも述べられています。「正義のための活動と世界のあり方を変える行動に参加すること、即ち、全ての圧迫から人間を解放することは、福音宣教の大切な一部分であり、教会の使命の大事な一部分であることが明らかになりました。」

私たちは、圧迫からの解放と、正義のための活動を、神のみことばを宣べ伝えることと分かちつことはできないのです。

### 行動における相違点

このシノドスで述べられている見解は十分にはっきりしていますが、それでも疑問や不安、とまどい、また緊張が起こるのを避けることができませんでした。その事実は素直に認めざるを得ません。シノドスの呼びかけを具体的な行動に移すとき、正反対の見方や、少なくとも一致しない考え方が現われてきました。

今日の私たちは、このような不一致の中にも、調和を見出すことを試みる必要があります。

まずはじめに、不一致が根本的な考え方の相違からではなく、重点の置き方の違いから起こっていることに気づかなければなりません。そして今日、解放と正義を論じる場合、私たちの態度、活動、生活態度のどこに重点を置くべきかを考えてみなければならないのです。例えば、次の場合、どちらに、より重点を置くか、それによって不一致が現われてくるのです。

1. 人間関係における正義に重点を置くか、それとも、神の前における正義に重点を置くか。
2. 神への愛にか、それとも、隣人への愛にか。
3. キリスト者としての愛徳にか、それとも、人間的正義にか。
4. 個人的回心にか、それとも、社会変革にか。
5. 今日の人生における解放にか、それとも、終末論的な将来における人生の救済にか。
6. キリスト者としての価値を土台とした開発にか、それとも、科学技術や社会的なイデオロギーの応用に基づく開発にか。

ではこれから、これらの6つの項目について、それぞれ掘り下げてみたいと思います。

### 正義と教会

1. 教会の使命はこの地上に正義を行き渡らせることだけに留まりはしませんが、シノドスが明らかにしているように、正義を行き渡らせることが教会の使命の中の重要な一部分であることには違いありません。

旧約聖書にもこのことが示されています。主なる神と選民の間の最初の契約は根本的に人間の間正義を守らせる契約であったのです。それは、人間間の正義を冒せば、神御自身との契約関係を断つことになるほどでありました。

また、新約聖書を見れば、虐げられている人々の解放と正義の勝利を実現しなければならないという救いの福音を人々に伝える使命を、キリストが御父からいただいたことが判ります。「貧しい人々は、幸いである。」それは、なぜでしょうか。それは、まさに解放者がすでにここにおられ、神の国がすでに訪れているからに他なりません。

### 隣人愛

2. 私たちは神への愛と隣人への愛を実践するように命令されています。キリストの言葉に注目してみましょう。

キリストは“人を愛する”ことは“神を愛する”ことに「似ている」と言われました。この二つの掟は一つとなって律法全体のまとめになっています。また、最後の審判の時にキリストは、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイによる福音書25・40)と言われました。

アルファロ神父は、次のように述べています。「キリストが示された神の国に迎え入れられるか否かは、弱い人々や虐げられている人々に対するその人の態度如何によります。即ち、虐げられている人々というのはイザヤ書58章1～2節に書かれているように、人間の不正の犠牲者であって、彼らのために神が御自分の国を建てたいのです。ここで驚くほど新しいことは、社会から軽蔑され、取り残された人々を、キリストがご自分の兄弟とされていることです。キリストは飢餓に苦しんでいる者、貧しい者、弱い者の側に立ち、味方となりました。このような弱い立場にある人々は、皆、キリストと共に歩んだ兄弟なのです。従って、このような人々になすことは何事も全てキリストのために行うことなのです。キリストの兄弟を救うために立ち上がる者は、誰でも神の御国に迎え入れられるのです。これに対し、このような人々を悲惨なままにして顧みない者は、皆、自ら御国に入ることを拒否する者なのです。」(『キリスト教と正義』教皇庁正義と平和評議会1973、28頁)

### 愛と正義はいだきあう

3. キリスト教の見方では、神への愛がちょうどそのまま隣人への愛となるように、愛と正義の問題も全く同様で、この二つは区別して考えられず、實際上ひとつの問題なのです。言い換えれば、ひとりの人を愛しながらその人をどうして不当に扱うことができるだろうかということです。

愛から正義を取り去れば、その愛は死物と化してしまいます。また、もしあなたがあなたの愛する人を尊敬すべき人格として見られないならば、あなたはその人に愛を持っているとは言えないのです。たとえあなたが、人を公平に扱うというローマ法の考え方に従って、「正義とは各人に与えるべきものを与えることだ」と言ったとしても、キリスト者は全ての人々一敵をも含めて一を愛すべきであるという命題から逃れられないと言わなければなりません。

私たちは、人々を愛さずに神を愛しているとは言えないように、私たちが正義を行動で見せない限り、私たちに愛があるとは言いきれないのです。私が述べている正義のための行動は、単に個人主義的なものではなくて、次の3つのことを意味しているのです。

(1) 人間を手段化しない

私たち自身の利益のために、人間を手段化することなく、全ての人を尊敬する基本的態度を持つことです。

(2) 地位を悪用しない

人それぞれの地位には、その地位特有の特権・特典がありますが、その地位と特権・特典に振り回されたり、また、それを自分の利益のために悪用したりは絶対しないという確固たる態度が必要です。もしそうでなければ、その人は他の人々を圧迫することになってしまうのです。地位の特権・特典に溺れてしまうということは、不正の結果手に入れた利益をむさぼっている人のように、結局は不正に協力しこの世の中に不正がはびこるようにしてしまうことになるのです。

(3) 不正に対して立ち上る

不正を単に拒絶するのではなく、むしろ、不正に反対して立ち上る強い態度を持つことが必要です。即ち、不正な社会構造を改革することによって、この世の弱い人々、虐げられている人々、社会の底辺に置かれている人々などを解放するために、他の人々と協力をする決意が必要なのです。

### 個人的な悪への傾き

4. 罪は、単に個人的な行為によって犯されるものだけではありません。私たちを取り巻くまわり全体（“環境”）が、全体として罪を犯すこともあるのです。そうなる罪は、私たちの慣習、伝統、自発的反応、判断基準、思考方法、想像力、意志などを低下させてしまいます。“環境”を左右するのは、単に私たち自身ばかりではなく、むしろ、それは、私たちが育てた人々や、私たちの世界を構成する全ての人々によって形造られるのです。

私たちは生まれつき悪に傾く傾向があります。神学用語で“情欲”と言っているものです。まさしくこれこそ、アダムの罪と歴史における人間全ての一私たち自身を含めての一罪につながっているのです。

人が回心し、神がその人を義とされた時、その人は心の底から神と人々に心を向けます。結果として、この時にこそ、厳密な意味で罪がぬぐわれるのです。ところが、その罪の結果は“環境”を支配し続けているのですが、多くの場合、人々はそれに気づいていません。

キリストは、単にその恵みで個人を罪から救い、個人の内心を清めるためだけに来られたのではなく、私たちの“環境”をも含めての私たち全体を、神のために生かすために来られたのです。キリストは単に罪をなくすために来られたのではなく、罪の結果をなくすため、しかもこの地上において、罪とその結果の“環境”をなくすために来られたのです。

### 社会的な構造へ

ではここで、社会の構造変革と個人の回心との関係に見られる両者の共通点の内容を見てみましょう。

もし、“個人の回心”が内心の変革に留まるようなものならば、それは“義化”を十分に正しく表わすものではありません。というのは“義化”とは、人間が新しくなる出発点で、少しずつ“環境”のあり方を変革させるものであって、決して単に個人的なものであるだけでなく、社会的なものでもあるからです。

もし、この点についてお互いに同意できれば結論は簡単に出てきます。なぜなら、一般的に言って、私たちが自分たちのためにつくった慣習、または、社会・経済・政治などの諸制度、および商業上の諸関係といったこの世の中の構造というものは、その不正の中に留まる限り、罪を犯すことが目的化されてしまっている具体的な組織体となっているからです。

これは、歴史における私たちの罪の結果であり、同時に、罪を継続させるとともにより大きな罪を犯す原因ともなるものです。

### 聖ヨハネと“この世”

以上の現実に対して、一つの聖書的な捉え方があります。聖ヨハネは、世の中の仕組みとその現実を否定的な見方で“この世”と呼んでいます。個人的なレベルにおける“情欲”に相当するものを、社会レベルにおいては“この世”と呼んでいるのです。伝統的に言えば、“情欲”は「罪から生まれるものであり、私たちが悪に傾かせる」ものです。

“情欲”に対するのと同様に、“この世”もまた、私たちにとって浄化する努力の対象でなければならないのです。このような正義についての新しいヴィジョンは、当然、新しい霊性、修業を生むはずで、むしろそれは、今までの伝統的な霊性・修業の発展であり、単なる個人的なものではなく、社会的な次元をも含むものです。一言で言えば、内的な回心だけでは十分でないのです。神は、単に私たちが自己を神に向け直すだけではなく、神のために全世界が神に向き直ってほしいと呼びかけておられるのです。私たちは、個人の回心を社会構造の改革と切り離すわけにはいかないのです。

### 闘いは終わらない

5. それゆえに、このような浄化、このような社会的な修業、この世の解放といったことは、人生に対するキリスト教的な態度の核心ですので、正義のための闘いに加わらない人は、結局、人々への愛や、時として神への愛をも拒むことになってしまうほどです。正義のための闘いに、決

して、終わりはありません。そして私たちの努力がこの世の中で完全に成功することもないでしょう。だからと言って、そうした努力をすることに価値がないとは言えないのです。

神は人間の力でもって目的を達することをお望みで、そのような言わば部分的な成功をも求めておられます。その部分的な成功こそキリストがもたらして下さった救いの言わば初穂なのです。そしてまた、それは御国の到来のしるしであり、人々の間に神秘的に拡がりつつあることの目に見える徴候なのです。

もちろん、そのような部分的な成功は部分的な失敗を含んでいます。場合によって非常に苦しい失敗もあります。“この世”に対する闘いの中で、多くの人が負け、押し潰されることもあるのです。なぜなら、“この世”はそう簡単に打ち負かされるものではないからです。“この世”は、自分に属さない者や反対する者を迫害し、できる限り抹殺してしまおうとするでしょう。

けれども、このような失敗は単なる表面上のことでしかないのです。「義のために迫害される人々は、幸いである。」(マタイによる福音書 5・10) まさに、ここにこそ、「よい働きをしながら、ことごとくいやしながら」(使徒言行録 10・38) 十字架を背負われた、キリストの姿があるのです。

#### 技術の必要性和限界

6. この世の中に不正があるということは周知のことですから、このような一般的な指摘の仕方では十分ではありません。このことは誰でも同感だと思います。このような原則の下で私たちが現実の世界に目を向け、地理的、社会的、文化的にどこに罪があり、どこに不正がひそんでいるかを指摘することが一番重大なことなのです。これにも誰もが同感されると思います。

けれども、それをするためには技術と学問が必要です。それらは分析や行動の手段となるものだからです。また、イデオロギーも必要でしょう。分析や行動の計画を立てる時、ひそんでいた不正を顕わにしてくれるからです。こういったことも誰もが賛成してくれると思います。

ではそこまで一致すれば、キリスト教的な価値やキリスト教的な志しが果たす役割はまだ何か残っているのでしょうか。

往々にして忘れがちですが、技術とイデオロギーがいくら必要であるとしても、それらは歴史的に見ても、善と悪との混合から生まれてきているということを決して忘れてはなりません。技術とイデオロギーのうちにも、不正が種々の形で含まれている場合が多いのです。つまり、その技術とイデオロギーは道具ですが不完全な道具なのです。この点においてこそ、キリスト教的な志し・価値観が働かなければならないのです。その道具を使うと同時に、それを批判的に見なければなりません。技術とイデオロギーには自己を絶対化する傾向があるからこそ、それらを相対的なものとして正しく見る必要があるのです。キリスト教的な志しも、このような道具なしには新しい世界を築くことができないからこそ、それらを再評価して絶対的なものとして受け入れてはならないのです。

## 第2部 教会が求める人間像

第1部の考察を背景にして、この第2部を考えてみたいと思います。つまり、今日の社会に正義を広めるために、「6項目の考察」で前述した<sup>あいたい</sup>相対する価値を調和させる人の養成について述べましょう。

私のように年を重ねた人間には、これからも養成の継続—生涯教育—を実施することが大切であり、やがて私たちにかわって立ち上がる若者の場合には、根本的な教育のもととなる養成を行うことが大切でしょう。

生涯教育に関して言えば、イエズス会学校の卒業生会がその生涯教育の一番代表的な場とならなければならないと強調したいのです。これこそ卒業生の使命です。イエズス会学校に協力して、生涯教育のために具体的な計画を立ててほしいのです。また、そこにこそ卒業生会の存在理由があるのです。

#### 教育と回心

この生涯教育について、あまり狭い解釈をすべきではありません。生涯教育は必ずしも技術や専門知識を最新のものとするということでも、激しく変動する世界の問題に対処するために必要な再教育をすることでもありません。むしろ、キリスト教教育において最も特記すべきは、回心への呼びかけでなければならないのです。

今日において、このような回心は、時のしるしから神のみ旨を見究め、それに従って正義のために活動する者となる準備を私たちにさせるものです。

#### 他者のために生きる人間

今日の教会あるいは世界には、どのような人間が必要とされ求められているのでしょうか。一言で言えばそれは、“他者のために生きる人間”です。このことについて、深く考えてみたいと思います。

“他者のために生きる人間”と言えば、種々の疑問を起ささせるかも知れません。例えば次のような疑問です。「人間の根本的な本質と相反するのでは?」「人間は、“自分自身のために存在する”のでは?」「理性と力を持っている人間は、それによって、一般的に自分自身を世界の中心に置く傾向を持っているのでは?」そして、「これこそが人間の精神生活であり人間の歴史ではないでしょうか」と言われるかも知れません。

人間は、良心や知識、力を神から与えられているので、確かに一種の中心ではありますが、他のものを自分の中に引き入れる中心ではなく、自分から外へ、まわりの他のものへ向かっていく中心なのです。

人間には自分自身を他者のために用いようとする愛があります。人間にとってその愛こそ全人格を意義づけるものです。本当に愛する人だけが、人間として完全に自分を実現できるのです。他者から自分を閉ざそうとする限り、その全人格を全うできず、自分自身の価値を低下させて

しまうのです。

### 利己主義者

自分の利益のためにのみ生きる人は、他者の役に立てないだけでなく、もっと悪い結果を生んでしまいます。その人は、排他的な心をもって利己主義的に知識や力、富をふやすことに努めるため、それらは人間の成長のため誰にでも神から与えられた手段であるのにもかかわらず、必然的に、その人は自分より弱い人々から奪ってしまうことになるのです。

もし、人類への奉仕というものが考えられないならば、どのようにしてこの世の中を、もっと真に人間的なものとすることができるでしょう。利己主義的な人は、この世の中を人間的なものにしないばかりか、人間自体を非人間化してしまいます。また、人々を支配することによって人間を物質化してますます利用し、搾取しようとするのです。

### 非人間化の悪循環

そして、もっと悲劇的なことには、利己主義的な人はそうすることによって自分自身をも非人間化してしまいます。自分が得た所有物のために自分自身を捨て去り、もはや自己を掌握した人間ではなく、その欲望と目的のために生きる単なる物と化し、所有物の奴隷になり下がってしまうのです。

私たちが非人間化すれば、心の奥底でフラストレーションを感じます。私たちがなりうる自分の理想の姿、あるべき姿、人間としての価値を前にして、物に溺れてしまっている現在の自分に一種の敗北感を覚えるのです。本来私たちはまず自分自身でありたいからです。

そして、もっとより多くの物を得ることによってそのフラストレーションから逃れられると考えがちです。そして、人より多くの物を得ようとして、私たちは無意味な終わりなき競争に落ち込んでしまうのです。

そうなる私たちにはこうした悪循環を断ち切る余力がありません。水面に投げ込まれた石によってできた波紋のように、欲望、競争、自滅によってできた波紋はだんだんと広がっていき、ついには、波紋を作った石がだんだん沈んでいくように、もっと大きなフラストレーションに陥り、ますます私たち自身を非人間化することになってしまうのです。

### 罪の社会化、構造化

自分も他人も非人間化してしまう利己主義を一つの生活様式とする場合、私たちは利己主義そのものを社会機構の中で目的化することになります。利己主義の個人的な罪から始めて、自分と他人を非人間化していく中で罪は広まっていきます。そしてその罪は、社会の構造の中に組み込まれてゆき、やがて罪そのものが社会構造の中で目的化される結果となり、社会的な罪になってしまうのです。その社会的な罪は考え方や制度を毒し、社会機構それ自体が、絶対的な力を持つようになり、社会に大きな悪をもたらし、もはや私たちの力の及ぶところではなくなってしまうのです。

### 悪には善で

では、このような悪循環からどのようにしたら抜け出すことができるのでしょうか。

まず指摘できるのは、その悪循環の根底には利己主義、愛の否定があることです。それでは、利己主義と不正が広く行き渡っている環境や、また、それらが社会の構造に組み込まれているところでは、愛と正義に生きようとすることは自殺行為ではないでしょうか。そのようなところで、私たちはそう簡単に愛と正義に生きることができるでしょうか。

ここで重要になってくるのは、キリストのメッセージの核心です。聖パウロはそれを端的に次のように言っています。「あなたがたは、悪によってではなく、善によって悪に打ち勝つようにしなさい。」(ローマの信徒への手紙 12・21) この教えは、敵を愛するキリストの教えで、キリスト教の試金石です。

私たちは大抵、他人に対して良くありたいものですが、素晴らしい社会の中でならそれは簡単なことです。しかし、今日の社会のように、悪と他人の利己主義が社会組織の中に組み込まれ、私たちを脅やかしている社会ではそれは大変難しいことです。

このような場合、悪には悪で、利己主義には利己主義で、憎しみには憎しみで、侵略者にはその相手と同じ武器で対抗するといったことは、最も安易なことです。しかしこうしたやり方をとることはかえって、悪が私たちを完全に打ち負かすことにならないでしょうか。なぜなら、私たちは人々に傷を負わせてしまうばかりか、自分自身をも傷つけ、悪化させてしまうからです。まさしく私たちは、聖パウロの言葉に反して、悪に勝利を与えてしまうことになるのです。

### 愛こそ力

本来、悪は善によってのみ、憎しみは愛によってのみ、利己主義は寛容の精神によってのみ打ち負かされるものです。このようなやり方で私たちは、この世の中に正義をもたらさなければなりません。そのためには、単に不正を行わないだけでは十分ではありません。むしろ、没我的な愛をもって社会をすすめる必要があります。

これは確かに素晴らしい考えだけでも、少々抽象的だと言われるかも知れませんが。それで次に、具体的な点から掘り下げて考えてみたいと思います。

### 日常生活に生かす三原則

愛に基づく正義の原理を具体的な日常生活に生かす上で、次の三つの態度・心構えを指摘したいと思います。

#### (1) より質素に生きる

まず第一に個人として、家族として、また社会団体としてより質素に生きるように固く決意する必要があります。そして、贅沢な生活やそれを求めての社会的競争をやめるか、少なくともそのスピードを落とすようにしなければなりません。消費社会の風潮に断固として抗しなければなりません。

今日の社会で必要とされている物であるからとか、友人やまわりの人々も持っている物で

あるからといって、自分も得ようとするをやめましょう。全人類の多くの人々はそのような物を全く持たずに生きています。

こうして、節制の生活によって生み出された金銭を最低の生活の支えも得ることができないでいる人々に回すようにしましょう。

### (2) 不正な利益をやめよ

第二に、明らかに不正と言えるところから一切利益を得ないという、固い決意が必要です。そればかりではなく、貧しい人々の労働のおかげで、すでに豊かな人々がより一層の利益を得ているような社会的・経済的の制度にとって益になる活動には、強く反対しなければなりません。

自分の特典ある地位を強めることにはではなく、恵まれない人々のためにこそ、自分の地位を下げるように精根を傾けたいものです。ここで注意しなければならないことは、そのような少数の特典ある地位には立っていないから、自分には当てはまらないといったような考えを持つべきではないということです。普通の地位にある人でも言えることだからです。たとえ自分より恵まれた立場にある人々によって、自分がその不正の犠牲者となっている場合でも同じことが言えるのです。私たちは、金持ちや豊かな人々にはではなく、私たちの国やいわゆる第三世界の国々に住む貧しい人々にこそ、また、社会の底辺で最も恵まれない生活を強いられている人々にこそ目を向け、その人々の立場から考えているはずだからです。

### (3) 不正な構造を変えていく

第三に、最も難しいのですが、単に不正な社会構造に抵抗するだけではなく、積極的に変革していく心構え、社会を変えていく者になる固い決断が必要です。本当に不正なところからくる利益、収入を減らしていくことを決断すれば、すぐに社会構造そのものを変えなければ生きていけないことに気づくでしょう。

けれども、あまりにも簡単に自分の地位から降りることは軽率なことです。ある場合には正しいことかも知れませんが、そうすることは、一般的には、むしろ利己主義者に全ての社会機構を手渡すことに過ぎなくなってしまうからです。

ここに私たちは正義のための闘いの困難を感じます。また、技術やイデオロギーなどの手段・道具に頼ることの大きな必要性もここにあります。

そしてここでも、卒業生同志の協力は単に有益であるばかりか極めて必要なこととなってきます。従って、卒業生会の助言者の中に恵まれた人々や豊かな人々だけではなく、労苦して働く人々も招くようにしなければなりません。なぜなら、抑圧されている人々こそ社会変革の中心とならなければならないからです。恵まれた人にできるのは、その人々に協力し、変革しなければならない機構へからの要求を上から後押しすることだからです。

### 他者のために生きた人、キリスト

“他者のために生きる人間”、これこそ、イエズス会教育というより、カトリック学校教育の最高目的です。基礎教育、高等教育、また生涯教育の目的はそのような人間を育てることな

ければなりません。

もし、以上の私たちの考察に筋が通っているとすれば、そのような人間を育てることこそ間違いなくカトリック学校の教育の伝統なのです。また、イエズス会教育においては、聖イグナチオの霊操の精神が今日の社会にあてはめられた結果なのです。

“他者のために生きる人間”となることによって、私たちは、ただ充実した生活を送る人間となるだけではなく、聖パウロのいう“霊的”な人、聖霊に従って生きる人、ひとりの完全な人間となれるのです。そのような人こそ聖霊に満たされた人であって、キリストの霊に従う者なのです。

そのキリストこそ、この世の救いのために、ご自分の生命を与えられた方です。人間とされた神こそ、他の人々にまさって“他者のために生きる人間”であったのです。

## 執筆者紹介

ビセンテ・ボネット	上智大学名誉教授、カリタス女子短期大学教授
越前 喜六 (えちぜん きろく)	上智大学名誉教授
ホアン・アイダル	上智大学神学部准教授
石澤 良昭 (いしざわ よしあき)	上智大学学長、外国語学部教授
片山はるひ (かたやま はるひ)	上智大学神学部教授
高祖 敏明 (こうそ としあき)	上智大学理事長、総合人間科学部教授
小山 英之 (こやま ひでゆき)	上智大学神学部講師
増田 祐志 (ますだ まさし)	上智大学神学部准教授
中村友太郎 (なかむら ともたろう)	上智大学名誉教授
ペトロ・ネメシュギ	上智大学名誉教授
大橋容一郎 (おおはし よういちろう)	上智大学文学部教授
クラウス・リーゼンファーバー	上智大学名誉教授
宗 正孝 (そう まさたか)	上智大学神学部教授
高山 貞美 (たかやま さだみ)	上智大学神学部准教授
竹内 修一 (たけうち おさむ)	上智大学神学部准教授

(アルファベット順)

## 編集委員会

矢島基美、大橋容一郎、瀬本正之、増田祐志、高山貞美、片山はるひ

### 上智大学のこころ ソフィアの源泉とキリスト教ヒューマニズム

2009年4月1日発行

発行者 上智大学

発行責任者 石澤良昭

印刷所 プリントボーイ・ビジネスサポート

非売品

このテキストは、上智大学2009年度教育イノベーション・プログラム  
(申請代表者：瀬本正之)の一つとして採択され、その助成を受けて  
作成されたものです。